

旧制松江高等学校教師

カルシユの足跡を追って

◇4◇

若松 秀俊

双子の住居のうち、隣の前身)によって報道さ 武一郎らが、火事場の馬のウツドマン一家の住んでおり、この地区の人 鹿力”で運んだとのことだ家は、昭和十二(一九三七)年、復活祭の期間に火災に遭ったが、近隣の助力により鎮火した。

そのときの人々への印象のの礼広告も掲載されが、ますますカルシユを日本好きにしたようである。長女のメヒテルトが臭いから、九歳のメヒテ

住居と庭 (中)

火災時 隣人の行動に感嘆



昭和8、9年ごろのカルシユ夫妻と長女メヒテルト。左の2人はお手伝い

後年、何度もいろいろな人に語っている。

出火の原因は、隣人の英語教師ウツドマンのお手伝いの火の不始末であった。火災の様子は「松陽新報」(山陰中央新報)に

母が出産間近で用意していた産着を抱えておろろしていたという。この時、近所の人々が断りもなく家財道具を避難ろしていったという。延焼もなく鎮火した。荷物がすべて元通りに戻された。これが実は

筆一本欠けることなく元イツ留学中に同じ研究所に戻ったことに感動して、家でもに研究に従事し、アメリカのヤング教授の家に過ごしたとき、彼の娘の自動車のドアがこじ開けられて盗難に遭った。その思い出がメヒテ現在では米国ワシントン州に在住しているヤング元奥レゴン健康科学大学教授の話の思い出した。

そのことを時々、感慨深く思いつくという。ある国、またその国の人々に対する外国人の感情を決定付けるのは、こんな時、支払いのため、ちよとカウンターに置いてた財布を忘れた。この古き奥谷の文化財ともいふに気がつかず友人と店を出たところ、若い女店員が二百以上追いかけて、財布を自分たちの手に戻してくれた。敗戦から間もなく、日本が極めて貧しかったころのことだ。

「日本人とはこんなに正直な人たちだったのか」と、強烈な印象を受けたという。これが当時、大学卒業間もない一人のアメリカ人の日本人に対する観念を、今に至るまで固定してしまうほどの体験であり、彼は今でも

大きな願いである。事実、二人の娘は、そのような施設があれば喜んで手元を、松江の市民に寄贈したいといっている。

(東京医科歯科大学大学院教授)

昭和五十一年、筆者が聞かれた。そのときの話

授の話の思い出した。

の治安の様子を彼女から